2026 年度　第 1 回　国際地域看護研究会定例会　議事録

日時：2026 年 4 月 18 日（土）13：30～16：25(前半：活動研究報告、後半：会員総会)
開催方法：対面・オンラインハイブリッド形式
場所：JICA 関西　3 階セミナー室 31・32
〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通 1 丁目５－２
担当者：事務局／那須ダグバ・宮本・瀬川・市川・伊東
出席者：（会員）神原、李、高橋、吉野、黒野、 柏木、森、楊、村松、アルチャナ、中井
（非会員）藤野、吉本、亀井、内田（順不同、敬称略）

1. 活動・研究報告

テーマ：博士論文発表会「日本の国際看護教育の役割」
発表者　那須ダグバ潤子氏（京都橘大学看護学部看護学科准教授／本研究会代表）

発表者は、自身の留学経験、海外での看護実務経験、移民家庭での生活経験等を背景に、12 年間継続してきた研究成果として博士論文の概要を報告した。研究目的は、①日本人看護師が海外（主にオーストラリア）で働く理由と日本の看護観の解明、②日本とオーストラリアにおける国際看護教育・異文化教育の比較、③それらを踏まえた日本の国際看護教育再構築の提案である。

研究方法として、オーストラリア就業経験を有する日本人看護師 15 名へのインタビュー調査、および日豪双方の看護教科書・教育課程・関連文献の比較分析を実施した。主な結果として、オーストラリアで働く日本人看護師は、休暇取得のしやすさ、勤務条件の明確さ、多様な雇用形態など労働環境を高く評価していた。一方で、自身や家族が医療を受けるなら日本を選ぶとの意見も多く、日本の看護には丁寧さ、患者への配慮、チーム協働への信頼が示された。他方、海外では同国人コミュニティの希薄さや文化適応の困難さも語られた。

教育比較では、日本では 1990 年代以降に国際看護教育が制度化されたが、英語学習や海外体験偏重、概念整理の不十分さが課題として指摘された。これに対しオーストラリアでは、植民地化と白豪主義の歴史を経て多文化主義政策を背景に、文化的多様性、人権、先住民理解などを基礎教育段階から必修化し、近年は Cultural Competence から Cultural Humility へと展開している。さらに Cultural Safety については医療看護における安全の中核的基盤として認識されている。

総合考察として、日本の看護が有する「察する文化」や関係性重視の強みを言語化しつつ、多様性を前提とした実践力を育成する教育への転換が必要であると提案された。また、教員には看護学に加え、社会学・歴史学・文化人類学等の学際的視点が求められるとした。

質疑応答

質疑では、若年世代看護師の海外志向、円安による出稼ぎ的移動、日本の一括採用・配置制度と専門職育成のミスマッチ、専門看護師の処遇問題などが議論された。また、オーストラリアにおける柔軟な雇用制度のほか、管理職志向が低いスタッフナースの存在についても紹介された。

さらに、日本では医療通訳制度の国家的整備や移民政策との連動が不十分であり、その影響が医療現場に及んでいる点が指摘された。今後の教育課題として、異文化看護の再定義、人権教育、グローバルヘルス、ICT 活用、リカレント教育、e ラーニング教材整備などの必要性について活発な意見交換が行われた。以下、質疑応答及びディスカッションの一部を抜粋。

市川：（自身もオーストラリアで看護師経験があることに触れて）オーストラリアでは日本人同士でも集まりにくく、日本人の間においても永住権の有無などによる階層や、人種間に加え、多国籍の留学生間においても渡豪時期の違いによって形成される階層が存在する。自身も根本にある価値観の違いから現地コミュニティへの参加は限定的になり、最終的に職場でアジア系コミュニティを作り集まっていた経験がある。

李　：12 年間の研究を通して、日本の看護職の働き方や価値観の変化について、どのように感じるか？

那須ダグバ：その点は研究の限界の一つと認識しており、現在は労働環境や経済政策の視点も含めた追跡調査を開始している。看護学生は入学当初には国際的な活動や多様な可能性に前向きである一方、学年が進むにつれて、労働環境への不安や将来への悲観的な認識が強まる傾向がみられるが、看護職の労働環境自体も現在変化の途上にあると捉えている。

神原：日本の看護は、信頼関係や非言語的コミュニケーションを重視する独自の特徴がある。一方、オーストラリアの看護は比較的ドライであり、日本の看護を学んだ看護師が海外で働く際に、価値観やケアのあり方に戸惑いを感じることがあるとの指摘があった。ただし、そのようなスタイルが合う日本の看護師も存在すると考える。

宮本：日本の看護が「丁寧」と高く評価されるが、日本の看護教育のどのような点が良い影響を与えていると感じているか。

那須ダグバ：日本の看護教育においては、多様性とか包摂性とか、いろんな革新的な教育をしようという動きが盛り上がっている。一方で、基礎看護教育においては、まず最初に看護師になる者としての態度や、身だしなみから教えている。これに関する賛否はあるものの、こうしたことも看護の丁寧さにもつながっているのだろうと考えている。

黒野：日本では、同一患者をチームで継続的にケアする中で、回復過程を共有し充実感を得られるが、オーストラリアでの派遣のような単発勤務の看護師が多い環境では、そのような継続的関わりによる充実感は得にくいのではないか。

那須ダグバ：単発勤務には負担もあるが、その仕組みにより看護師が柔軟に休暇を取得でき

る利点がある。日本の看護にみられる自己犠牲的な働き方は比較的少ない。日本の国際化の方向性に関する議論が十分になされておらず、教育に反映するためのグランドデザインの構築が必要である。

2. 報告・審議事項（※以降敬称略）

1） 活動報告（2025 年度の活動を含めたこれまでの活動）

第 2 回定例会で報告する。

2）COIL への参加について（吉野氏より以下の内容が説明された）

・COIL とは：Collaborative Online International Learning 国際協働オンライン学習であり、多職種・多領域でオンラインと対面を組み合わせた教育手法による新たなグローバル教育の形。

・開催日時：2026 年 10 月 31 日（土）9:30 もしくは 10:00~開催予定

・場所：京都キャンパスプラザ

・内容：午前中はミニレクチャー、午後はグループワークの予定

・参加対象者：看護教員（看護教育に関する内容のため）

３） 2026 年度活動計画について

・第 1 回定例会　2026 年 4 月 18 日(土)

世話人：事務局

会場：JICA 関西

内容：博士論文発表会「日本の国際看護教育の役割」（那須ダグバ氏）

・第 2 回定例会　2026 年 6 月 20 日（土）13:30~

世話人：神原

会場：JICA 関西（予定）

内容：ヘルスボランティアに関する発表

・「国際看護教育の役割」に続く内容の発表（李）

・インドネシアでの授賞式の報告と挨拶（森口顧問）

・COIL 国際地域看護研究会共催　2026 年 10 月 31 日

・第 3 回定例会　2027 年 2 月頃

世話人：黒野・事務局

会場：JICA 関西

内容：未定

４）2025 年度会計報告および 2026 年度の会費納入について（事務局・会計）

会計担当瀬川より、2025 年度の収支全体として、現在の余剰金は 250,830 円である。会計監査は黒瀧氏に依頼し、内容に誤りがないことを確認済みであることが報告された。

5. その他

・神原氏より、日本 WHO 協会が日本民間公益活動連携機構（JANPIA）の休眠預金等活用制度に基づく資金分配団体として、「だれひとり取り残されない外国人医療」事業（2024～2027 年度）を実施している旨の報告があった。また、活動団体の一つである「まなびと」と連携し、研究会として調査・研究を共にこの研究会でも検討していきたいとの提案があった。

・広報伊東より、国際地域看護研究会ホームページ改修案の説明および見積額（108,900 円）が提示された。改修内容は、歴代事務局メンバーを掲載するページの新設と、入会希望者がボタンから入力フォームへ直接遷移できる機能の追加である。審議の結果、当該見積額での改修が承認された。